沖縄本島概見記

森　　為　三

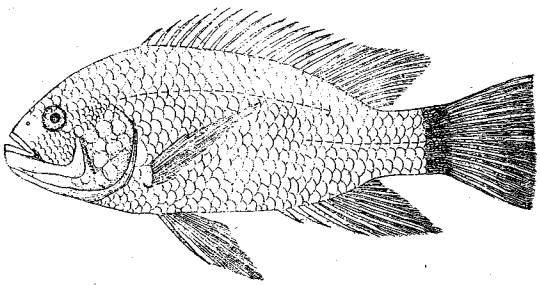
編輯の方から、昨夏沖縄行の見聞記を書けとのことに執筆することにした。しかし私は7月20日飛行機で那覇につき、21日中部22日北部を車でまわり、23日日本生物教育会大会に出席、24日午前同大会午後は南部戦跡をたずね、25日早朝飛行機で出発したので、採集旅行にも加わらず、したがつて概見記になる次第である。

沖縄本島は、その地質が中部以北は古生層で山岳地帯であるが、以南は基軸は第3紀層、周辺低地は隆起珊瑚石灰岩からなり丘陵地帯である。それで北部には500メートル位の山があり、川らしい川もあるが、南部は東播の丘陵地のように高い所でも200メートルに達せず水量の少ない小川があるに過ぎない。

私がまわつて見た感じでは、この地質の相違が北部と南部とで、景観は勿論フロラやフアウナが大分ちがつているように思われた。今まで本島の北部と南部とのこれらの相違を発表した論文は知らないが、北部には森林やジヤングルがあり、木生羊歯の繁茂しているのも見られる。作物にしてもイネ、パインアツプル、バナナが栽培されている。南部は森林やジヤングル地帯は見当らず、ソテツが多く羊歯の繁茂している所は見なかつた。南部の石灰岩地帯、戦跡はこの地帯にあるが、赤土のアルカリ土壌でサトウキビや大豆が主に栽培されているところである。

動物にしても、蛙類は北部では見られたが南部では見当らなかつた。殊にナミエガエル、イシカワガエルは沖縄本島特産で北部にのみ産する。鮎も北部の川にはとれるも南部にはとれない。その他淡水魚は河川短小なために沖縄特産のものはなく、極めて普遍的な、コイ、フナ、ドジヨウ、ナマズ、メダカ、ウナギ、オウウサギ、タウナギ、タイワンキンギヨなど10種位である。これらの淡水魚も多くは北部でとれる。

近時台湾から移入されて、生活力の旺盛なために急激に繁殖しているのはカワスでメ Tilapia mosambica Peters である。この魚はアフリカのモザムビツク地方原産であるが、タイ国で養殖を始めたのがもとで、台湾や韓国でも移入して養殖を試験しており、沖縄へも米人が移入したとのことで、私の泊つた旅館の池にも放養されていた。いずれそのうちに日本本土にも移入されると思われるので、図を描いて形態などを概説する。



スズメダイ　藤田悦久描

体は外見鯉に似て長楕円形で背鰭が長い。しかし鯉とは大いに異なり、鰭には棘がよく発達し、背鰭15棘12軟条、臀鰭3棘11軟条、腹鰭1棘5軟条、鱗は櫛鱗、側線上の鱗数30、側線は中断されて上側線は背鰭の後方の下で終り、下側線はそれから続いて尾柄の中央を縦走している。頭部に鱗があり腹鰭は胸位である。胸鰭・腹鰭・臀鰭の軟条は大変長く、尾鰭は截形に近い。体は暗緑橄欖色、大なるは30センチに達する。この魚の雌は、産卵後卵を口中に含み、孵化して稚魚が泳ぎ出すまで口内で保護する。カワスズメ科 Cichlidae に属する。沖縄では汽水魚のようになつて川口辺で繁殖している。肉味よきも小骨が硬いのが難点である。

次に沖縄水産試験場の標本を見たが、日本本土に見ない熱帯魚が多く、その中に日本魚類目録及び最近出版された沖縄動物目録にものつていない魚がある。この魚はインドシユモクザメ(新称)Sphyrna oceanica Garman で、シユモクザメに似ているが、頭の側方突出部が短かく、内鼻溝も短かい。吻も少し前に出で、頭の最大幅は吻長の3倍である。第1背鰭は胸鰭より著しく大きい。5対の鰓裂は胸鰭の上にある。印度洋・熱帯太平洋に産する。その他珊瑚礁に多い。チヨウチヨウウオ、ツノダシ、ブダイ、スズメダイの種類に興味あるものが多かつた。

昭和36年度総会御案内

昭和36年度、第14回総会は明年5月下旬、明石市にて開催されることに決定した。

第1日目は講演会、研究発表、見学（明石天文科学館、明石水族館など）、第2日目は兵庫県第1の原始林、太山寺山、及び雌岡山へバスで見学と採集の会が行なわれる。

なお研究発表希望の方は明石市県立明石高校、島田芳雄先生あてお申し込み下さい。　（室井　綽）